

風景の印象に対する橋梁の影響 — 色彩に注目して

平成 26 年 2 月 石川 大貴

要旨

目的

橋梁景観の研究を行う際に、“かたち”と“いろ”はどちらも外すことのできない要素だが、“かたち”と“いろ”を総合的に評価する景観評価手法は未だに確立されていない。本研究では、その基礎的研究として、橋梁の“いろ”が風景に対してどのように影響を与えているのか調べることを目的とする。

方法

「3色配色の Semantic Differential 法による感情分析」という、主に工業デザインにおける色彩設計手法の研究成果をまとめられたものを改良して考案され、村田によってさらに改良された手法を用いる。この手法は、様々な橋梁景観の中に占める色彩の面積を考慮し、こころよさ、はなやかさ、目立ち、年齢感という4つの因子における感情値を求め、判定を行う。

結論

- ・ こころよさの印象は、背景による影響が強いと考えられるが、橋梁の色彩に薄い水色を用いることにより、こころよい配色となる設計がおこなえる可能性がある。
- ・ 橋梁の色彩には、明度の高い淡い色を用いることで、はなやかな配色となる橋梁を設計することができる。また、海洋部の橋梁においては、はなやかな印象になりやすく、山間部の橋梁は、渋い印象になりやすい。
- ・ 風景の色彩と明度差・彩度差が大きくなる色を用い、橋梁の領域面積差も大きくさせることで、目立つ橋梁に設計することができる。
- ・ 橋梁の色彩には、彩度の高い塗色を施すことで、若々しい配色となる設計が行える。また、風景の色彩と明度差をもたせることにより、さらに若々しい配色となる。

指導教員 清水 茂 教授